

第7章 セサミストリートは学校への準備教育となりうるか？

ヤマハ（株）教育システム事業部
加藤 友香

本章では 93 年に実施された National Household Education Survey (以下 NHES) の結果についての記述である。

NHES は、アメリカ教育省の国立中央教育統計 西部事務局によって行なわれている定期調査である。93 年調査では「スクールレディネス（学校への準備）」が調査対象のひとつであった。調査対象は、全米 10,888 名の子供達（小学 1~2 年、園児、PRESCHOOLER）であり、「セサミストリート・PBS 教育番組の視聴」に関するデータが分析されている。調査内容は、以下 4 点に集約される。

1. 就学・園前の幼児はどのようにセサミストリートを視聴しているか？
2. 番組視聴は、年齢・性別、人種などの家庭環境の差がどのように影響するのか？また、地域差・所得差・両親の教育レベル等の差は視聴に影響を与えるのか？
3. 現在、セサミストリートを視聴している就学前の幼児は、そうでない幼児と比較し、文字・数字認識がよく出来るか？
4. 就学前のセサミストリート視聴は、就学後の子供達にプラスの影響を与えるのか。幼児期に番組を見ていた子供は小学校で直面する問題により良い対処が出来るのか？

結果

調査結果より

1. 就園前の幼児にとってセサミストリートが非常に身近な番組であることが明らかとなっている。 就学前の幼児の 77% が週 1 回はセサミを視聴していること、また、就学に近づくに連れ、視聴頻度は落ちるものの、PBS が放映する教育番組の中でも最も人気のある番組であり子供達から高い支持を得ているとしている。

2. 教育水準の高い両親を持つ幼児は、そうでない幼児よりもセサミストリートをより低年齢から見る傾向があるが、視聴頻度の差は両者の間で特でない。

3. 子供への本の読み聞かせが、視聴時間に影響を与えている。 つまり、両親からあまり本の読み聞かせをして貰っていない子供は番組の視聴時間が短い。つまり、番組視聴時間は、他メディアとの接触頻度や時間とが関連することを示唆しているであろう。

地域差・家庭の所得差・人種の差によって、セサミの番組視聴が大きく変わることはない。

貧困層の幼児の85%が就学前にセサミを視聴しているという。また、人種間の差も、幼児の番組視聴には何ら影響を与えないことが報告されている。NHESによると英語を母国語としない家庭の幼児の大半がセサミストリートを視聴していることが明らかになった。

3. セサミストリートの視聴がリテラシーの習得を促進させ、特に低所得家庭の幼児は番組視聴とリテラシー習得との関連が強い。

4歳児の調査では、数字の認識・アルファベットの認識・ストーリーつなぎの3項目で、セサミの視聴群とNON視聴群に差異があるかを分析している。いずれの項目でも視聴群がNON視聴群よりも優れていた。但し、中流家庭の幼児には、視聴者・NON視聴者の違いが殆ど認められなかったのに対し、低所得者層の幼児では、両者に大きな差が認められた。

しかし、番組を視聴していた低所得者家庭の幼児でも、中流家庭のNON視聴群の得点に及ばない。(中流家庭では視聴・NON視聴には差異は殆どないのだが)

4. 幼児期におけるセサミの視聴が就学後、本の読解力にプラスに作用している、また、セサミをしていた児童の落第生も少ない。

また、この調査では調査対象が1・2年生迄となっているが、セサミストリートを就学前に視聴していた児童は両親や他人の助けなしに、読み進めることが出来る。セサミストリートが文字認識を促進させる効果は、先述したがそれだけではないことが明らかとなっている。

本章では、セサミストリート視聴が幼児に与える認知面への影響について測定されていた。しかし章の前半部分でも触れられていたが、「スクール・レディネス」の概念は、現在認知的側面重視から、社会的・情緒的側面の重視へと変わりつつある。今後はセサミが、幼児・児童の情緒的な発達にどのような影響を与えられるかについても推し量る必要があろう。

また、数字や文字の認識において、低所得者層の視聴者群が中流家庭のNON視聴者群にも及ばなかったことは、家庭環境の格差が与える幼児への影響が非常に大きいことを示唆している。今後番組を制作する上で、こういった家庭環境の格差による、レディネスの差を如何になくすか。が課題の1つになろう。

番組だけでなく、他メディアとの組み合わせ、ワークブックなどのテキスト作り等メディアミックス施策が必要になると考えられる。